

槐かい

岡井省二創刊

平成24年3月号

平成二十四年三月一日発行 第二十二巻第三号 通巻第二四九号 毎月一回一日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



素粒子

高橋将夫

緋の衣脱ぎ裸木となり
にけり
御仏の肌は冬木のさるすべり
冬の蚊に御仏の手のぬくみかな
灯の揺れて外に青女の気配かな

浮寝鳥昔の恋の夢を見て
校庭は風の落葉も競争す
雪囲中を覗いて終へにけり
人生は片道なりき神の旅
神の旅伴も荷物もなかりけり
ふとき棒探してゐたり年用意
素粒子は無常なりけり冬霞

槐安集

水野恒彦

母の死は冬の怒濤の一つなる
冬菊に書淫の眼休めけり
一行詩仄めき欲しき葱を引く
肉声は生者のものよ歳の市
文学は進まざり年歩み去る

延広禎一

錦鯛の鱗立ちたる男時かな
極月の至心発願火を渡る
恋飛脚黄泉平坂雪催
写楽の謎インカの謎やセロリ噛む
くだら野に紅蓮の忘我相对図



加藤みき

魯田に朝のひかりの届きたる
アラビアの女人の眼石榴の実
池中に鯉の褥となる落葉
日向ぼこそばかす美人の笑ひかな
八咫鳥も山鳩も来よ冬青の実

石脇みはる

盆梅の枝ぶりほめてゆきにけり
如何に生き如何に終へるか福寿草
瘦身を試み挫折除夜の鐘
母がりや白山茶花と白い雲
大徳寺別院にして冬ぬくし

中島陽華

尻押され銀杏葉葉の坂上る
東雲にハーブの音色羊歯の揺れ
割れもある柘榴七つとピカソかな
大雪(たいせつ)や朝の光の鯛茶漬
舟吊つて時雨の里のさくらの木

栗栖恵通子

東寺二句
五智 五 四大 天大日百八つ
去年今年馬頭はうしろ振り向かず
寒不動おのれに刃向けにける
血の色の実を渡りゆく寒鴉
定位置の五臓六腑や去年今年

竹内悦子

く東半島にさきの見え冬の海鵜の潜りかな
十一月八日明礬温泉にて
まだ枯れてをらぬ蠟螂青々と
心電図赤きコートとすれ違ふ
首のせてみたる師走の砂湯かな
裾分けの慈姑数の子赤芽芋

大島翠木

裏白の闇たましひを置き去りに
束の間のしぐれ藪騒おさまらず
狐火や木々には風の遅速あり
師走月蝕阿件の門を過ぎてより
樹の中を水の流るる十二月

雨村敏子

土佐和紙に五色で描く手鞠かな
煮凝りの腮のあたりの呼気吸気
石路のいろ腹を決めたる色であり
竹林をぬけ 枯蓮の 邑 一つ
綿虫の影 赤糸を張りつめる

本多俊子

ちちははへ何を語らむ新酒汲む
寒昂ときどき詩うたの下りてくる
朱欒熟れむらさきの風芳しや
折鶴のふわつととばむ年の暮
風花や空也蒸しなどいただいて

近藤きくえ

金泥に枯れし蓮の騒ぎをり
ふところによるこび悲しび山眠る
これしきのこととふんばる 枯蝸螂
何気なきそのひと言よ実千両
胸熱き日々給はりし年惜む

近藤喜子

霜のこ糸星のまたたく波動かな
柚子風呂や太白星を手の平に
狼の滅びし闇の弛みけり
近未来すでに來てゐる冬芽かな
人間を寡黙にしたる冬の海

谷村幸子

形のよき松のびのびと冬障子
冬日どつと櫂の洞に入りにつけり
枯芝に人が憩うて三笠山
ポインセチア一人一鉢むかいの子
緋の蕪抱へし時の匂ひかな

瀬川公馨

べらぼうめ除夜の鐘つく談志かな
凍星の百鬼夜行を止めむと
棉吹くや畑の面の盲まし
呼子鳥きこゆ頃なれ去年今年
大年の獄卒出たり入つたり

久保東海司

冬の日を浴びんと孔雀羽根拵ぐ
柿落葉といへどおろそかならぬ嵩
鎮魂の更地に禱り息白し
山枯れてぞくぞく躰る星の数
木の実落つかごめかごめの輪の中に

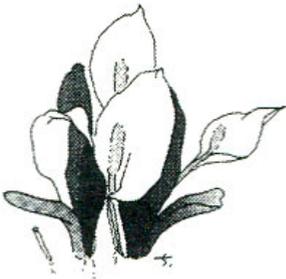
西村純太

氷輪の宙と湖にあり我にあり
枢いま仙境にゆかむ冬銀河
子狸と目と目が合ひて極楽寺
抽出に亀を眠らせ冬籠り
数へ日や命なる臍ほそ清めをり

永観堂詠

中野京子

見返るは待つ思ひなり紅葉寺
遠目には拈華微笑の枯はちす
うつつなる南瓜スープの黄金色
日向ぼこ時のせせらぎみてゐたる
日々は露の間なりし去年今年



槐市集

寺田すず江

九冬に禱りの歌の訝かな
龍の玉こころの襞の整はず
渺茫と枯れ尽しけり芒原
オリオンの煌めき鷗尾の立ちあがる
冬萌えに第九流れてきたりけり

中 貞 子

稜線の扇形なり初日かな
葱刻む今朝の光となりにける
柚子風呂や皆既月食始まりぬ
月食や備長炭の跳ねる音
綿虫や記憶消えたること怖し

中 島 昌 子

波ひとつ大きく立ちて初日の出
静けさの墨すつてをる二日かな
息白く片言上手き留学生
かばかりの用に手間どる年の暮
膝頭ポンとたたいて年用意

中 田 禎 子

冬耕の天地に漢一人かな
晩三吉でんと座りて主留守
墓石に降る初雪のすぐ溶けて
脳天に響く子の声冬の鵲
蝦蛄仙人掌紅をつけたる稚児の列



槐集

高橋将夫選

山の日をためこんで鳴く笛子かな
岡崎 犬塚 芳子

冬枯れや別れの言葉手短に

メタセコイア空群青に枯れ尽くす

瞑想の山は時雨れてをりしかな

川涸れて流れの変はることもなし

焚火して夜の真髓に触れぬしか
枚方 熊川 暁子

去年今年等身大の影ふんで

思ひ羽うばつて来たるもがり笛

手鏡の枯野に紅を引くをんな

年末といふ紐あれば結びをり

大阪を起こす男と 関東煮
守口 柳川 晋

ひかれつつ抛らるるゆゑ独楽はづむ

霊の道 鼯の道と賑やかに

進化とはかうなることよ大海鼠

セロリ嚙み切り何もせぬ日と決める

大津繪の鬼の攪乱年借む
京都 竹中 一花

葉牡丹や心に白き渦の巻く

正月を詰め込む巾着袋かな

鴉色の風を掛布に山眠る

朝光や百畳佛間底冷す

フレームに媚葉立ち込めぬたりける
摂津 中田 禎子

年の瀬や不協和音のピカソの絵

カトレアや小さすぎたるガラス靴

大甕の氷の底に顔のあり

シリウスの爛々と立つ熊野灘

冬耕の畠一枚人二人
守口 岩下 芳子

大木の梢伸びゆく冬北斗

冬風の突堤の先海展け

月食の全き容十二月

山茶花や東海道を少し逸れ

銀河往来

高橋将夫

◇「槐集」観照

山の日をためこんで鳴く笹子かな 犬塚 芳子
夏、山で繁殖した鶯は冬になると里近くに現れて、チチチチと地鳴きをする。「山の日をためこんで」の措辞が、おだやかな冬の日さしの中で笹子が鳴いている様子を上手に表現している。他に「冬枯れや別れの言葉手短に」へメタセコイヤ空群青に枯れ尽くす」「川涸れて流れの姿はることもなし」などの句も蕭条たる冬枯れの景を淡々と詠み込んでいて好感が持てる。

焚火して夜の真髓に触れぬしかな 熊川 暁子
夜に広がる闇にも真髓があるという。もしあるとすれば、なるほど広い闇に輝く焚火の炎の、一点こそが真髓なのかもしれない。他に、「年末といふ紐あれば結びをり」の句は「去年今年貫く棒の如きもの」という虚子の句を逆手に取っているように愉快。「手鏡の枯野に紅を引くをんな」の句は枯野に艶を添えていて。なお「思ひ羽うばつてきたるもがり笛」の句の「思ひ羽」はオシドリ尾の両脇にある銀杏の葉形の羽。

ひかれつつ抛らるるゆゑ独楽はづむ 柳川 晋
独楽は抛ってしゃくくるから回る。凧は引けば揚がる。誰もが自然にやっている行為だが、言われてみると作用と反作用がセットになっていておもしろい。「進化とはかうなることよ大海鼠」はこれまたなんとシニカルな一句。

鴉色の風を掛布に山眠る 竹中 一花
「鴉色の風」を掛け布団にするかのように山が眠っている。「鴉

色の風」はおだやかな冬の日さしを想わせる。鴉が山のあたりに飛んでいるのかもしれない。山はさぞ心地よく眠っているのであろう。

フレームに媚薬立ち込めぬたりけり 中田 禎子
温床に育っている果実の香りをまるで媚薬のようだという。私もぜひ一度嗅いで見たいものだ。

月食の全き容 十二月 岩下 芳子
部分月食が、不完全な形なら、皆既月食は「全き容」といえる。見えない部分にも完成と未完成があるのだ。

修羅道を抜けて見え来し石露明り 岩月優美子
修羅道を抜けて石露明りが見えてきたという。どんな時にも、希望だけは失わずにいたいと思う。

まづ仰ぎ見し龍天に昇りける 谷岡 尚美
龍が天を仰ぎ見ている。龍が天に雄飛する一瞬の緊張感がよく伝わってくる。

石工焚く松ぼつくりの勢かな 近藤 紀子
石切り場の焚火で乾いた松ぼつくりが勢いよく燃えている。突然、松ぼつくりが爆ぜそう。

素直なる人には見えて竜の玉 十川たかし
私があつたに竜の玉に出会わないのは、どうも素直でないかららしい。何事も素直に見ることが大事なようだ。

(以下略)